



ICT 海外ボランティア会会報

No. 52

2014年9月19日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : sv@info.ictov.org

目次

- ◆ 特別寄稿
 - 他国の経済を発展させる、そこに日本の生きる道がある
ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

- ◆ 技術協力の思い出 (7)
 - タイ王国モンクット王ラカバン工科大学設立に寄与
—電電公社バンコック初代事務所長 故牧野康夫氏の功績—

- ◆ 海外グラフィティ
 - ドイツの香り (2) 夏の鳴門に第9が鳴り響く
日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

- ◆ JICA シニア海外ボランティア 2014 年度秋募集
事務局

- ◆ 海外 IT 事情
 - 東南アジアで台頭するメッセージングアプリ (その1)
情報通信総合研究所副主任研究員 佐藤 仁氏

- ◆ 現地便り (レソト便り 3)
 - 相槌は口笛で
ICT 海外ボランティア会幹事 SV 山下 満男氏

- ◆ 第 10 回 海外情報談話会開催模様 事務局

- ◆ 第 11 回海外情報懇談会開催のお知らせ 事務局

他国の経済を発展させる、そこに日本の生きる道がある

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝

一人ひとりが自分の身につけるものを眺めて見て、その原料が輸入物資になっていないものがあつたら、お目にかかりたい。繊維類にしろ、金属類にしろ、食品類にしろ、輸入につながっていないものはほとんどない。エネルギー源にいたっては、100%近くが輸入である。

こういうものを輸入するために、どうしても日本は輸出を伸ばさざるを得ないのだが、その輸出も無理してはいけない。他の国に迷惑をかけるような野放図な輸出をしたり、身勝手な輸出政策をとったりしてはいけない。これは確かだ。

輸出をしなければならないが、そのやり方には、やはり一つの秩序というものがある。これは厳然と守り抜かなくてはならない。

発展途上国の GNP を増やし、国民生活の向上させるための生産財などは、それらの国の経済発展のために、非常に意義のあることである。

輸出先が発展途上国であれ、先進国であれ、果たす役割は同じであり、先進国も栄えてもらわなくてはならないし、発展途上国にはもっと早く栄えてもらわなくてはならない。そうすれば世界の貿易が増えるから、日本の輸出も増え、GNP も大きくなり、国民生活もさらに向上するという形で、日本が生きていく道もおのずから開けてくる。

【石井 孝氏のひと言】

真藤さんは、電電着任後間もなく、日米間の貿易摩擦解消の一環として、ノーザンテレコムの子会社である交換機メーカーの導入を決断した。従来から交換機を納入している国内メーカーや、政界の一部、更に社内などから、何故、手のかかる、厄介な外国製の交換機をわざわざ買わなければならないのかといった、反対の声が上がった。アメリカの回し者か、などといった陰口も叩かれた。

こういった中で、導入後のソフトウェアを中心にしたメンテナンスの重要性を考えると、交換機全体のソフト内製化を担当する部門がノーザン機の面倒をみるしかない判断し、技術的バックアップを全面的に行うことにした。

ただでさえ、内製化ということで憎まれものになっていたのに、ノーザンの裏方になるということで、何かとやりにくいことも多々あつたが委細構わず仕事を進めた。

ノーザンからの技術移転や、それに関わる訓練、経費処理など、色々木目細かな交渉を通し、外国企業とのビジネスの進め方や、日本と欧米諸国の基本的な文化的背景の違いなど、金で買えない貴重な勉強ができた。

また、ノーザンのソフトウェア開発拠点に、こちらの社員をノーザンの研究員待遇で長期派遣することができ、海外の生の先進技術をダイレクトに学べたことは、その後の開発技術改善に図りしれない効果をもたらした。

またビジネスには、円滑な人間関係を作ることがいかに大切かを、改めて認識させられた。

当時は特に気が付かなかつたが後で考えると、真藤さんは、間近に迫るグローバル化の波音を逸早く直感し、貿易摩擦に事寄せ、ある意味で井の中蛙であった我々に対し、広く世界に眼を向けるよう仕向けたのではないかと思えてならない。真藤さんは、ノーザンの会長であったフィッツジェラルド氏と大筋での方向を固め、細かい遣り取りは我々に任せたが、その成り行きに関しては始終チェックを怠らなかつたように感じられた。

技術協力の思い出（7）

タイ王国モンクット王ラカバン工科大学設立に寄与

－電電公社バンコック初代事務所長 故牧野康夫氏の功績－

本文は電気通信協会発行の月刊誌「電気通信」2008年5月号より、同協会の許可を得て転載するものです。これは NTT バンコック会(当時)の有志により纏められたものです。紙面の都合上、一部を割愛させていただきました。(事務局)

日本の技術協力の成功例として発展し、現在学部数13、研究センター2、学生数1万6千名を擁するタイ王国有数の大学に成長したモンクット王ラカバン工科大学(KMITL)より、電電公社バンコック海外駐在事務所(当時)初代所長の牧野康夫氏が名誉学位(博士号)授与の榮譽に浴され、去る2008年2月21日に開催された同大学学位記授与式において、同国シリントン王女陛下から授与されました。氏は1958年バンコックに赴任され、KMITL発足の基礎づくりに尽力されました。それはわが国の技術協力の道を開いたもので、功績は顕著なものがあります。

授与式にはご高齢の牧野氏に代わって岡 純一氏(NTTコミュニケーションズタイランド社社長)が代理出席しました。本稿のうち、「名誉学位授与式の模様」は岡氏に寄稿していただきました。また「牧野康夫氏講演－モンクット王ラカバン工科大学事始め－」として、牧野氏の講演(2007年11月3日、NTTバンコック会主催)の内容をNTTバンコック会の方々の協力を得て掲載いたします。

1. 名誉学位記授与式模様(岡 純一)

当地の日本人の間ではタイ桜とも呼ばれるチョンプー・パンティップの花が咲く中、タイでは万仏節の祝日である2008年2月21日、バンコック近郊のBITEC展示場を会場として、KMITLの学位記授与式が執り行われました。

今回の学位授与式は一昨年6月から昨年5月までの間に博士課程、修士課程、学士課程の所定の課程を修了した学生約4,800名への授与式で、展示会場の広大なホールにKMITLの朱色のガウンをまとった大勢の卒業生が着席しているところは実に壮観で、KMITLがタイでの主要な大学の一つとして多くの技術者を社会に送り出し、タイ社会の発展に貢献しているこ

とを実感させられました。

授与式は学生、教職員、来賓等一同が着席の後、シリントン王女陛下がご入場され、牧野様同様に今回の授与式で名誉博士号を授与された 3 名の方々への学位記授与に始まり、約 4,800 名全員へ王女陛下御自らが学位記を手渡しされました。その後、学生一同からの挨拶、王女陛下からのお言葉があり、約 3 時間の式典が終了しました。

厳粛かつ整然とした式典終了後は、会場の建物の外で待ち構えていた家族、友人、後輩学生たちが、卒業生を取り囲み祝福しており、歩道に乱立する屋台ともあいまって大変な混雑ではありましたが、会場周辺は祝賀ムードがあふれていました。

また、皆様のご配慮により、外国人として唯一の来賓として式典を間近に拝見させていただいたこと、また今回の授与式に残念ながらご出席できなかった牧野様の学位記並びにガウンを滞りなくお預かりすることができましたことに御礼申し上げます。

2. 牧野康夫氏講演 ―モンクット王ラカバン工科大学事始め― “バンコック赴任と学校作りのきっかけ”

私は今年 90 歳になりますが、タイに赴任したのは 1958 年で、丁度 50 年経ちました。今から考えるとあの頃は楽しい時期で、タイはよい勉強の出来た所でした。

出発に当って郵政省（当時）の方から、「現地に日本の援助で学校を作りたいからよろしく頼む」と何気なく言われました。これはなかなかいい案だと直感し、何とか完成させたいと思いました。私は外務省調査員の辞令も同時に頂きましたが、それには当時の梶井総裁が奔走されたと後ほど伺いました。そしてタイ王国大使館の一角に机を構えました。

着任して 2-3 週間経った時に、革命が起き戒厳令が出されました。私の経験では日本で 2.26 事件に戒厳令があり物々しかったので、これは大変だと思い家の中で窓を閉め切って、当時は冷房などありませんから暑い中で 1 週間位じっとしておりましたが、大したことはなく過ぎました。この経験がその後のタイを理解するうえで、私の活動に幸いました。タイは非常に良い国でおだやかな国である、あわてない国であると感じました。

“学校作り作業開始、やっと合意に “

学校作り作業開始のきっかけは、通信関係の役所を引退したあるタイの方の紹介で、交渉を始めることが出来たことと、タイで生まれ育ち日本の高等学校を終えた豊島さんを採用したことです。彼女はタイ語が上手で、お陰で私はタイ人と意志の疎通がもてるようになりました。

学校の話に戻りますが、そのタイの方は「学校は文部省の管轄だから、文部省を紹介しましょう」とのことで、職業教育局長を紹介されました。局長は「TOT（タイ電話公社）の中に作るわけにはいかない」と云うので、それを日本側に話したら、「日本の電電公社の中央学園のようなものを TOT をご支援することで設立できないか」とのことでした。

それで TOT の英国で教育を受けた総裁と面談したのですが、総裁は「訓練所があるから学校はいらない」というのです。ところがそこには机が置いてあるだけなので、「これじゃ訓練は出来ないでしょう」と云うと、「そんな訓練はいらないので、文部省に行きなさい」と

頑張るのです。文部省では大歓迎だったので文部省の中で考えようと思いました。

TOT の総裁がいないという理由が分かりました。当時タイでは交換機は全部イギリス製でした。「日本にもステップバイステップ交換機があるが使わないか」と尋ねたら、「方式が違うから駄目だ」とのことでした。総裁は英国の機器が一番良いと信じきっていたのです。

この案件が文部省（当時）所管になったら ODA 予算が郵政省から移ってしまうので、TOT にしたい日本側の気持ちも分かりましたが、それでも日本側を説得することになりました。当時は日本との連絡は電話ではなく手紙か電報しかありませんでしたし、一旦日本に帰ると当時パスポートは全てシングルなので新たにパスポートを取るには、2、3 ヶ月かかる状況でした。

そうこうしている内に、「一度、牧野の云うことを聞こう」と電電公社初代海外技術連絡室長の山田捨録さんがタイに見えられました。当時、TOT はバンコクの電話しかやっておらず地方は別でした。それで職業教育なので文部省の方がよいとのことで、ようやく日本側も納得してくれました。

“協定未締結で機器受け取り”

合意はできたが協定締結が難題でした。日本側で「電電公社が学校作りの協定に関与するのはおかしい。また協定を結ぶには国会を通さなければならない」とのことでした。国会を通すには何年もかかってしまいますが、結局行政協定にすれば国会にかけなくてもよいことになりました。

その時点で、日本側で予算がついてタイに送る機材は全部揃いました。そこで何とか早く協定を結ばなければならないのですが、今までタイと結んでいる協定の中に含める案が出てきました。それで戦争中日本がタイに軍を送っていたので、タイにその対価を返さなければならないとのことで、その協定に乗ることにしたのです。しかしタイ側は、「必ず結ぶから心配するな」と云ってくれました。このような弾力的な処置がタイの大好きなところでした。

それで協定の案文は日本側で作ることになったのですが、その案文がなかなか来ない。「インドと同様な協定を結ぶからそれが出来るまで待ってくれ」とのことでしたので、タイ側と忍耐強く話をつなぎました。

ようやく日本側が納得のうえで、協定未締結のまま機材を受け取ることになったのですがこれが容易でない。「その内協定が出来ると文部省の局長が云っているのだからいいでしょう」と大臣クラスの税関長と交渉をし、税金なしで受け取ることになりました。

送られてきたのは 360 梱包です。チャオプラヤ（メナム）河の港の倉庫にとりあえず陸揚げされました。それを収納する倉庫を借りなければならないがそのお金がない。そこで先の局長にお願いしましたところ「大工学校を使いなさい」と云うのです。そこに行ったら屋根のないところもあるぼろ校舎なので「これはひどい」と話しましたところ、ある日突然その校舎が取り壊され、3 ヶ月後に新校舎が出来上がりました。こんなことで 6 ヶ月かかりましたが機器を無事引き取ることが出来ました。次にそれをどうして運ぶかが問題でしたが、運送屋の集まり場に行って交渉しトラック数台で運びました。

“日本の通信機器導入”

序に話しますが、英国帰りの TOT 総裁に替わり陸軍将校が総裁になり、それで日本の機器導入をこの方と交渉しました。若いフランクで士官学校を出た立派な方です。それで日本の機器を使うこととなり、ストロージャ交換機を入れることになったのですが、その前に伝送（搬送）機器が入ったりしました。細かく云うときりがないので割愛します。

それで着任 2 年目になって、大々的に日本の電気通信機器展示を 1 週間位ほどやりましたか、各メーカーさんが奔走してくれました。当時立派だったニューロードに事務所を建てたのでその一角で大いに宣伝をしました。

“ノンブリ研修センターの設立”

通信機器が導入された後、1960 年に ODA で、ノンブリ研修センターが設立されました。当初は電電公社の専門家が教師として 6 名派遣されました。場所は機材を搬入したノンブリの旧大工学校の建物を改造し使用しました。タイ側はこの研修センターを拡大していきました。

私の帰国後ですが、1971 年に新しい敷地（ラカバン）に校舎が造られました。徐々に教える内容が高度になり、現場技術だけではなく学術的な教育の場となっていきました。従って、電電公社や KDD（当時）等の現場技術ではなく、科学的な教育の場となりまして、同年にモンクット王工科大学（KMIT）が発足しました。従って、日本から派遣される教師も日本の大学の教師が然るべきと考えるようになりました。私は、国公立の大学よりも私立大学の方が適当であろうと考え、元郵政大臣でもあった当時の東海大学学長の松前重義氏に派遣を依頼しました。

松前氏は快く受諾して下さり、若い教授が派遣されるようになりました。松前氏と私は旧知の間柄であり、彼は日本の技術者が海外で活動することを念願していたことを、私はよく知っていたからです。松前氏は、教授の派遣の待遇や身分保障について心配なされたので、私は国公立大学の場合と同等の待遇とすることを説明しました。

このような経過を経て、JICA 長期専門家等として逐次 NTT、KDD、NHK や郵政省から派遣されている技術者は、東海大学等の教授達に代わっていきました。更に 1997 年に日本政府の支援で研究センター ReCCIT が設立され活発に研究活動がなされております。

“海外業務に携わる方々へのエール”

海外の仕事は、日本国内の仕事と全く異なります。日本人は往々にして日本国内での仕事のやり方と同等に処理しようとし、そのため海外の方から理解されることが難しくなります。海外の仕事はまずよく観察することです。仕事の遂行について当該国の方が云うことをよく聞き、日本と同じ方法を取らないことです。日本人は往々にして「日本では・・・」ということを使い過ぎる傾向があります。技術導入に当っては各国固有の問題を持つので、それを理解することが大切です。そこで当該国の方々との交流を盛んにするため、語学力が必要となります。タイでは中流以上の方は英語に堪能なので、まず英語力を持たなければなりません。その上出来れば当該国の言葉を身につけるように努力することです。また海外に派遣されたら、日本への通信報告を怠らないことです。そうすれば本社の幹部にも海外の事情がよく理解してもらえるのです。

また現地地の生活に馴染めない人材の派遣は避けなければなりません。当時はそのことでよ

く問題が起き、その処理に大変困難を感じました。

私がバンコックでいろいろ経験した時代からすでに 50 年たち、今は改善されていることも沢山あると思いますが、私が望むことは長期に亘って海外に勤務する人を育成することです。これから日本人が真に海外で生き生きと活動できるように願ってやみません。

海外グラフィック ドイツの香り (2)

夏の鳴門に第9が鳴り響く

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

奇しくも本年の6月の第一日曜日は、1日であった。本邦初演のベートーベン・第9は96年前の1918年(大正7年)6月1日、四国の坂東俘虜収容所であった。



前日から情報収集のため鳴門市内の「ドイツ館」を訪問したが、その収容所内の自由さに改めて驚かされた。なかでも象徴的なのは、陳列されている、実際に俘虜が使っていた“木製のボーリング球”で、この雰囲気の中から第9の初演が生まれたのだ。

暑い！それなのに開演時間前の長蛇の列。扉が開かれ、事前に購入した“自由席”券を手に、中央に近い後部の座席を陣取る。まず、合唱団がぼつぼつ入ってくる、白いブラウスに黒のスカート、女性合唱団が主力の第9だが、男性を中央部に、ヨコのコの字で女性を取り囲む、ついで両翼もこれまた女性だ。ステージの最前列にオーケストラが座る。

鳴門市長の挨拶、『なると第九』は4年後の2018年(平成30年)に「第九」アジア初演から100周年の記念すべき年を迎えます。これを大きな契機として、本市におきましては、世界で一つ、鳴門にしかない歴史的背景もつ『なると第九』をブランド化し、世界に向けて発信しようと「アジア初演『なると第九』ブランドプロジェクト」を始動したところでございます。

この演奏会の特徴は、指揮者とソリストはプロだが、合唱団は全てアマチュアであることだが、合唱団がアマチュアというのは確かによくあるけれども、この日のために全国から参集してくるいわば”臨時の合唱団“であることだ。但し、アマチュアとはいっても、その地では、練習を積んでいるから押し



なべて相当のレベルである。

具体的には県内組と県外組と分けて、県外を見てみると、例えば「会津第九の会」、あの人道的な俘虜の扱いで親しまれた所長「松江豊寿」大佐の出身地の会津。アメリカからは、L. A. Daiku (ロサンゼルス)の6名。かごしま、釧路の遠方も見える。総勢実に603名の多さである。

見渡すと観客は満員で、定員1,600名だから、指揮者、楽団員を加えると、2,300名弱となる。地方の文化会館の催しとしては、まさに“誇るべき”陣容と言える。

演奏が始まる。いままで椅子に腰かけていた合唱団員が立ち上がる、第4楽章「プレスト」は想定以上に圧巻である。昨年末での、同じ第9でプロの「サントリーホール」もののスマートさに比較すると、いかにもアマの“ワイルド”さである。ワイルドだが、「血が通っている」。それはまさに、「苦悩を貫いて歓喜に至れ」というこの第9のスピリットそのもののようであった。

お知らせ

JICA シニア海外ボランティア 2014 年度秋募集

事務局

シニア海外ボランティア 2014 年度秋募集は10月1日(水)より11月4日(火)まで行なわれます。

JICAのホームページ「シニア海外ボランティア要請情報概要」より、当会会員が応募し易い要請案件を抜粋しました。これを参考にいただき、積極的に応募されますことをお奨めいたします。最近の動向として、情報通信や品質管理に関する人材育成案件が多くなっています。また「電気通信・情報通信に関する応募者が減少の傾向にある」(JICA担当者)とのことです。奮ってチャレンジしてください。

区分、職種	国・配属先	要 請 内 容
コンピュータ技術	ミyanmar、情報通信技術研修センター	ネットワーク分野の研修内容改善、新設コース開設の支援、講師・研修生へ実践的指導
同 上	パプアニューギニア 国立最高裁判所	裁判所の新規システム開発のための提案・構築、同僚の教育、ITポリシー運営上の助言
同 上	ザンビア ザンビア大学	電気電子工学科において、コンピュータ・セキュリティ技術・ICT の講義、修士課程学生へ個別指導、同僚の講義アドバイス
電気通信	メキシコ、職業技術教育活性化センター	工業高校教師にIT技術を用いた遠隔教育のための開発・保守点検までの過程を指導
電子工学	カボベルデ、国立技能専門学校	通信及びアンテナの理論・実験実習、マイクロ及び信号通信システムの理論に関し、教員に指導
電気電子機器	パラグアイ、職業能力開発局	日本パラグアイ職業能力促進センターで、デジタル回線設計・アナログ回線設計の指導、実習機材整備・講義にも協力

同 上	パラグアイ 職業訓練校	電子科で、カリキュラム・指導計画改善、教員の知識向上による指導力強化、学習環境の整備
同 上	トミカ共、職業 技術訓練庁	職業訓練校電気科で理論・実習機材設計製作を支援、 同僚の基礎知識指導
同 上	コロンビア 電機 産業研究技術開 発公社	既存商品の省電力化・再生エネルギー活用製品開発促進、 電気自動車開発へ協力
同 上	メキシコ 工業高校	教員に向け、PLC・空気制御・水圧制御等自動制御システムの実 習授業の開発や技術支援し、技術研修を実施
同 上	チュニジア、機械・ 電気産業センター	産業機械保守の保守技術向上のため、巡回指導・セミナーを通 し職員らの技術向上
同 上	ボリビア 職業訓練校 1	実習機材の適切な操作・管理、同僚教員に操作・メンテナンス指 導、整備に関する助言・指導、アプリケーションソフトの開発支援
同 上	ボリビア 職業訓練校 2	実習機材の整備に関する助言・指導、 上級コース開設に向けた技術上の支援
同 上	ペルー 全国工 業訓練機関 1	電子電気技術（自動制御）分野の講師育成 カリキュラム改善・学生の企業実習マッチング等支援
同 上	ペルー 全国工 業訓練機関 2	PLC・プロセス制御等自動制御分野の訓練コース講師の知識・技術 向上、教授法改善のための協力
同 上	チュニジア 機械・ 電気産業センター	電磁気製品の規格認定検査、及び不適合部への改良助言機 能強化のため技術指導
経営管理	ベトナム 品質評 価測定認定機関	実践的知識・ノウハウ提供、6シグマ・リーンプロダクション等手法を用い たコンサルティング能力向上
同 上	チリ 製造 業輸出組合	品質管理・生産性向上のため企業診断・指導、品質管理・生 産管理・工場管理導入例・効果のセミナー開催
同 上	トルコ 中小 企業開発機構	組織能力・職員能力向上に資する人材育成プログラム策定支 援
品質管理	ベトナム 企業開発庁	中小企業支援センターで3S/5Sを切り口に、品質改善・生産性向 上を支援、セミナー開催支援
同 上	メキシコ 高等教育局	大学が実施する講義内容を診断し改善助言、セミナー企画・開 催、マニュアル刷新推進
同 上	ボリビア 職業訓練学校	学校職員に対し、5S・カイゼンの講習会実施、 学校に品質マネジメントシステム導入支援
同 上	チリ 企業組合	中小企業主・経営者・現場管理者・従業員を対象に生産性・ 品質向上等の技術指導、講演・セミナー開催
同 上	コロンビア ホコ ダ 商工会議所	中小企業に対し、5S・カイゼン等を用いた職場改善活動、 定期指導
同 上	コロンビア マニレ ス 商工会議所	中小企業に対し、5S・カイゼン等を用いた職場改善活動、 定期指導

同 上	コンビア 科学技術センター	中小企業の生産性向上プロジェクト支援のため、企業訪問指導による 5S 支援活動支援、教材改善・教育プロジェクト体制確立
同 上	パラグアイ、品質 生産性センター	中小企業の生産性向上・品質管理コンサルのため、企業訪問時の助言、企業の品質管理の知見向上
同 上	ヨルダン 職業訓練公社	インストラクター・スタッフに対し、5S 活動導入支援、定着のためのフォローアップ、より進んだ改善手法紹介・導入

詳細は JICA のホームページをご覧ください。追加要請案件が出てくる場合があります。また全国各地で開催される JICA 主催の「募集説明会」にも是非参加をお奨めします。（開催の詳細も JICA のホームページをご覧ください）。説明会では関係資料が入手でき、個別相談のコーナーも開設されます。

またこれに呼応して、「SV 経験を活かす会」主催の「よろず相談会」も開催されています。同会のホームページに開催の詳細が掲載されています。あわせてご活用ください。

海外 IT 事情

東南アジアで台頭するメッセージングアプリと背景（その 1）

情報通信総合研究所 副主任研究員 佐藤 仁

東南アジアの社会、文化の特徴は多様性である。東南アジアではそれぞれの地域で、さまざまな人々が生活しており、それぞれの宗教を信仰し、生活スタイルを保持してきている。そのような東南アジア地域でも都市化、近代化が進展してきている。特に 2000 年以降、携帯電話の普及は人々の生活にも社会にも大きな影響を与えたことに間違いない。

東南アジアの携帯電話市場における大きな特徴は次の 4 点に集約されると考える。

1. 圧倒的なプリペイド市場と中古端末
2. 台頭する地場メーカーのスマートフォン・中国製スマートフォン
3. 急速に拡大する Wi-Fi と進まない 3G
4. 台頭するメッセージングアプリ

1. 圧倒的なプリペイド市場と中古端末

東南アジア諸国では新興国ではプリペイド方式が主流であるため 1 人で複数枚の SIM カードを所有することが多い。そのため人口普及率が 100%を超えている国がほとんどである。携帯電話普及率が 100%を超えていないのは、ミャンマーだけである。

通信事業者もプリペイド SIM カードの販売促進に注力する。1 年を通じてあらゆるキャンペーンを実施している。たとえば、「20 通まで SMS 無料」、「30 分無料通話付き」などのキャンペーンが多い。これらのキャンペーン目的に SIM を購入し、キャンペーン分を利用してし

まうとそのSIMを利用しない人も多い。そのため利用者は次から次にプリペイドのSIMカードを購入することも多い。通信事業者はこれらのキャンペーンを立て続けに行うことによって顧客獲得競争に躍起になっている。

(表1) 東南アジア諸国でのプリペイド比率

インドネシア	タイ	カンボジア	シンガポール	フィリピン
98%	85%	99%	50%	99%

(各国当局等の公開情報を元に作成)

また東南アジアでは中古端末が大量に出回っている。10年以上前の中古端末が今でも利用されている。中古端末市場と同時にアクセサリも必需品である。日本ではアクセサリは、「ファッション」であるが、新興国ではアクセサリを装着することによって、傷や埃からスマートフォンを守り、次に中古品として売る時に、傷がつかないようにする。つまり傷や埃がついた端末は中古品でも高く売れないのだ。



(プリペイドSIMの販売) ジャカルタ



バンコク

2. 台頭する地場メーカーのスマートフォン・中国製スマートフォン

携帯電話、スマートフォンは日常生活の中に入り込み、誰もが所有している商品、すなわちコモディティ化した。そのため高くても高級なブランド品である必要はない。実用的で、かつ廉価で、デザインも良いものが欲しいという欲求が東南アジアでは強い。

新興国では地場メーカーが安価だがスペック、デザインともにグローバルメーカーの端末と見劣りしない端末を市場に投入してくる。いわゆる「100ドルスマホ」と言われる約1万円程度の端末である。地場メーカーの例として東南アジアではインドネシアの Mito、Nexian、タイの i-mobile、フィリピンの Cherry Mobile などが有名である。これらは日本では全く馴染みのない会社や端末だが、新興国では広告やポスターなどをあちこちで見かけ、人気の高さを伺える。また、これらの端末は地場で開発、組立、販売している。製造は中国や台湾で行っている企業が多い。東南アジア諸国ではさらに中国のメーカーのスマートフォンも人気がある。特に OPPO や Xiaomi などの人気が高い。これらは安く、デザインが良いからであろう。このような地場メーカーや中国製の端末も、いずれ中古品として市場に大量に流通していくのだろう。



スマートフォンを利用するカンボジアの軍人と僧侶



中古携帯電話を利用するカンボジアの子供ら。携帯電話は子供たちのおもちゃで、ゲームをしている。

現地たより レソト便り (3)

相槌は口笛で

ICT海外ボランティア会幹事 SV 山下 満男

1. 相槌は口笛

職場の同僚二人が話しているとき、「ワァオー」と言うような感じで片方の同僚から口笛が聞こえてきました。これは同僚の癖かなと思っていたらもう片方の同僚からも口笛が聞こえてきたのでそれが相槌の一種であることが判ってきました。

スポーツクラブのサウナ室内で他のレソト人同士が話している時も時々、口笛が聞こえてきます。しかし、会議等では口笛が聞こえてくることはありません。どうやら親しい仲間同士で話が盛り上がった時使うようです。

なぜ口笛を吹くのか？

レソトはヒツジや牛の放牧が盛んな国です。その、家畜たちは険しい山岳地帯で飼育され

ています。家畜たちをコントロールする等のために口笛を吹くからだろうと推察していますが本当の事は判りません。

「ワァオー」

2. 4つの財布と11個のカギ



4つの財布と11個のカギ

鍵は持ち歩くのが11個ですが、自宅にはこれ以外に20個ほどのカギがあります。



通勤途中の風景

朝のラッシュ時間

徒歩での通勤途中などで出会うレソトの人々は目が合うと手を挙げて親しく挨拶してくれます。一般的にレソトの治安は南アなどと比べると安全だと言われています。

しかし、日本人が6名いた頃、半年間で3名が財布を奪われる等の被害に会っています。これは年間の日本人被害率にすると100%です。別に、日本人を狙った犯行ではなく、レソトに多く在住しているアジア人（中国人）目当ての犯行です。中国人はレソト人からしてみるとお金持ちであり標的となっているようです。一方、中国人はピストル等で自衛しているそうです。UNのセキュリティオフィサーから安全に関する説明を受けた時、私が中国人だと思われているならそのまま、（ピストル等で自衛している）中国人だと思われていた方が安全だとの説明をうけ、釈然としない思いをしてしまいました。

窃盗等の犯罪は貧富の差があるところに多く発生しています。全員が同じように貧しい田舎では逆に安全な感じがします。レソトの首都であるマセルにはお金持ちもいる一方、地方から出稼ぎにきたものの、仕事を探し出せない貧しい人達があります。この状況がマセルの治安状況を悪化させているようです。

現在、住んでいる住居は比較的安全な場所ではありますが、それでも、窃盗被害が発生しています。住居侵入の被害等を防ぐために11個のカギを持ち歩いています。さらに、住居にはセキュリティシステムが導入してあり、不審者が侵入するとアラームが鳴り、セキュリティ会社に通報が行き、10分程度で武装したガードマンが駆けつけてくれます。

強盗等の被害に会った時の基本事項は無抵抗だと安全担当責任者から教わりました。持ち歩く財布には少額のお金しかいれずカード等貴重品は自宅に保管しています。街中で強盗にあったら大人しく財布を差し出すつもりでいますが。今のところ、財布は4個とも残っています。

3. バードウォッチング（小鳥の巣作り）



裏庭の木に造られた小鳥の巣



巣作り中の小鳥

大学から与えられている住居の裏庭の木に小鳥の巣が6,7個ぶら下がっています。二階の寝室から小鳥の巣作りを見ることが出来ます。

オスらしき（オスだと確認した訳ではありませんが、人間界の状況を小鳥に当てはめオスだと推測しています）小鳥がせっせと細長い草を運んできては木の枝の先端に器用に編んでいます。

巣の寿命は3~4週間程度です。これでは、卵が孵化する事が出来ないのではないかと思います。最初は葉っぱの青い色をしていた巣も3週間経つと茶色に変色し、そのうちハラハラと木の枝から落ちてしまいます。小鳥はそのことを見越してか、次の巣をせっせと拵えていきます。レソトの気候は冬（7月、8月）には零度以下に下がります。また、激しい雷の後、雨や雹が降ってきます。これらの厳しい気候から身を守るためにも巣は欠かせません。激しい雨の後、巣が1,2個に減ることがありその時は他人事ながらハラハラしてしまいます。

4. レソト式握手

レソトでの握手は一風変わっています。最初は普通の握手の仕方です。次には腕相撲をするように握り替えます。そして、再び普通の握手の握り方をします。これを1.2.3のタイミングで3秒間程で行います。最初は若干と感いましたが最近はずっかり慣れてしまい、この方が相手と意思疎通を図れたような気になってしまいました。

第10回 海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は去る9月5日（金）、JTEC会議室において開催されました。

講師は田上 智氏で演題は『海外グラフィティ』の裏側』でした。「海外グラフィティ」とは、講師が当 ICT 海外ボランティア会会報に連載で寄稿されているエッセイのコーナーで、今ま

で 14 回に亘り掲載されています。これらは全て当会のホームページに収録されています。当日は 25 名の参加があり、講演終了後も約 1 時間に亘り講師との対話が続き盛会でした。講演内容の概要は次の通りです。



「人はなかなか思うような人生を送れないなかで、アーティストと国際派だけは他人とは違った面白い人生を送っているのではないか？」というモチーフの元、やや唐突な冒頭の言葉から始まった。

谷崎潤一郎の「細雪」の解説で、女性心理をうまく表現した作家田辺聖子の言葉を引用し、その複雑さを講師の最近の体験談を織り交ぜて語り、ついで、売れっ子作家「沢木耕太郎」の人生での“燃え尽きること”の重要さとむずかしさ述べた。

「超安定した日本ほど退屈な社会はない」と言い切り、本人が NTT を早期退職したあと、テレビの業界に飛び込み、著名な MC の小宮悦子や、小谷真生子との交流やその人となりについて、あるいは天下の久米 宏のすごさにも及んでいる。当時もっとも印象に残る海外ロケは「ブラジル」で、ブラジル人の天真爛漫で度肝をぬく 2 つのエピソードにも触れた。もともとタイトルが「海外グラフィティーの裏側」でオフレコを前提としており、ここで記録に残せないのがいかにも残念である。唯一語れるのが、プロダクションとして使った日系アルゼンチン人の冗談として「銀座のクラブで一番もてるのはどんな職業か？」でそれは「国際詐欺師」であるというくだりだ。自身のニックネームは「3 シグマの外」というだけあって、テレビの業界のあとも、生き馬の目を抜く「投資銀行業界」にも身を置いており、テレビ業界と同じく、その「薄氷を踏むような毎日」にも触れている。望ましい国際派の条件としては、「受け身の強さ」であり、「感性とビジョン」の大切さにも言及し、これは国内派にも言えるのではないかと締めくくっている。さらに、既刊の自身の図書として「ガーナの熱い風」「さらばトミー・トロージャン」「豊かさの風営」「近江商人異聞」についてもその概要について触れていた。



第 11 回海外情報談話会開催のお知らせ

ICT 海外ボランティア会
共催 情報通信国際交流会

第 11 回海外情報談話会を以下により開催いたします。
参加をお待ちいたしております。

日 時：平成 26 年 10 月 24 日（金） 午後 3 時～5 時

場 所： 情報通信エンジニアリング協会

（渋谷駅下車徒歩 10 分、道順は同協会のホームページをご覧ください）

今回は場所が変わっており、JTEC ではありません。

話 題：「日本の ICT 産業の盛衰」～その復活に向けて～

講 師：元 NEC Biglobe 社長 元東京工業大学副学長 飯塚 久夫氏

話題概要：

日本の ICT 産業は、その基盤整備においては世界に冠たる状況にあるが、利活用において劣り、国際競争力で先進国はおろか新興国にも負けつつある。

ICT 利活用の促進が重要であるが、マイナンバー、パーソナルデータ等その環境変化がやっとなら離陸した。過去からの経緯と今後に向けた課題を述べる。

参 加： 入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または

村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 「技術協力の思い出」はタイのモンクット王ラカバン工科大学設立に寄与された故牧野康夫氏の功績を取り上げました。氏の業績は電電公社にとっては勿論、わが国 ODA の草分けで、タイにおいて今をときめく KMIT の基盤をつくれ、それに続き電電公社等の尽力がありましたが、世代が替わりそれが忘れられようとしていて寂しい気がしています。また氏は日本の電気通信のタイ進出の先鞭をもつけられました。
- ・ 今年も SV の秋募集が始まります。私にとっても SV の経験はとても貴重でした。本会設立の原点に立ち返り、恒例ですが JICA 応募の要請案件を整理し掲載させていただきました。皆様のお褒めいたします。（以上加藤）
- ・ 石井孝さんの「真藤語録」今回は「ノーザンテレコム」輸入の話題でした。真藤さんの経判断の紹介でした。それを受けて行動した石井さんの行動に敬意を表します。今後も期待しております。
- ・ 田上さんから（ドイツの香り 2）寄稿していただきました。鳴門市長の挨拶の、今後の努力を前

向きにその実現を見守りたいと思います。

- ・ 現地便り、山下さんの「レソト便り (3)」を掲載しました。山下さんのレソトの人達を見る視線が、きちっと、平らな視線から見ているのには今回も感動しました。(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：sv@info.ictov.org/)